

APE031-P15

会場: コンベンションホール

時間: 5月25日 10:30-13:00

オホーツク海底表層堆積物における花粉化石群集の平面分布 Pollen distribution in surface sediments on the Okhotsk Sea

菅谷 真奈美^{1*}, 奥田昌明², 岡田 誠³, 坂本 竜彦⁴

Manami Sugaya^{1*}, Masaaki Okuda², Makoto Okada³, Tatsuhiko Sakamoto⁴

¹ 茨大・理工・地球, ² 千葉県博, ³ 茨大・理・地球, ⁴ 海洋研究開発機構

¹Science and Engineering, Ibaraki Univ., ²Nat. His. & Inst., Chiba, ³Dept. Env. Sci., Ibaraki Univ., ⁴JAMSTEC

本研究では、オホーツク海を対象に、海底面における花粉化石群集の平面分布を明らかにすることを目的とした。このため、JAMSTECに保管されているオホーツク海域主要部の16地点より採取された海洋コアの表層試料を用いて花粉化石の抽出を行った。1試料の乾重1.5g程度から抽出した花粉化石に対して、単位重量あたりの花粉濃度を算出するとともに、通常の手順で花粉分析を行った。

算出した花粉濃度と花粉出現頻度により、オホーツク海域の花粉化石群集を1)沿岸域と2)沖合の2つに分帯した。1)沿岸域は、*Betula* や他の落葉樹といったタイガ落葉樹林の主要素の多産が特徴で、直近の陸上の植生を適切に反映している。花粉濃度は1000grains/gを超える地点もあり、深海底堆積物としては比較的高い値を示す。2)沖合は、針葉樹花粉の*Pinus* や*Picea* が特に卓越して産出することが特徴である。花粉濃度は500grains/gを下回る地点が多い。以上より、オホーツク海域において得られる花粉化石群集は、供給源からの距離が近いほど近傍の陸上植生を適切に反映することと、花粉粒子が海流によって遠距離輸送されずに堆積することが多いことが分かった。

以上のことにより、オホーツク海における沿岸域では、古気候復元において有意な花粉データを得ることができると言える。したがって、オホーツク海域において古気候復元を目的とした花粉分析を行う場合には、沖合よりも沿岸域の試料を用いることが望ましい。

キーワード: 花粉化石, オホーツク海, 古気候

Keywords: fossil pollen, Okhotsk Sea, paleoclimately